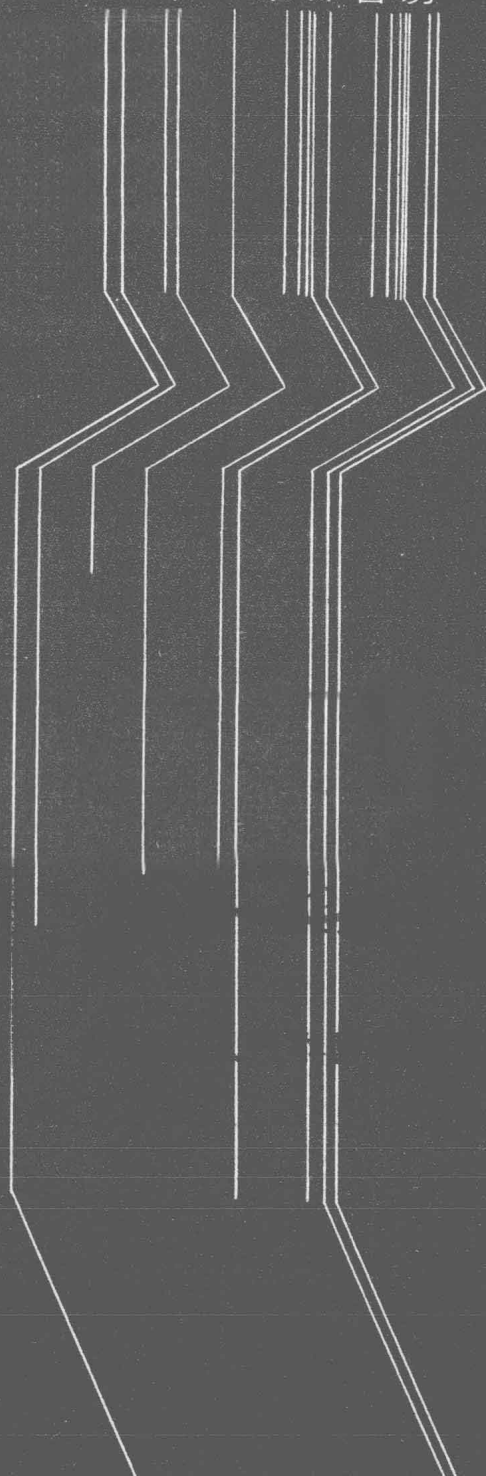


横溝正史集

日本推理小説大系 7 東都書房



日本推理小説大系第7卷

横溝正史集

定価三八〇円

著者 横溝正史

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三二一一

振替 東京 七二七三三二

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年七月二〇日第一刷

目次

横溝正史

本陣殺人事件 5

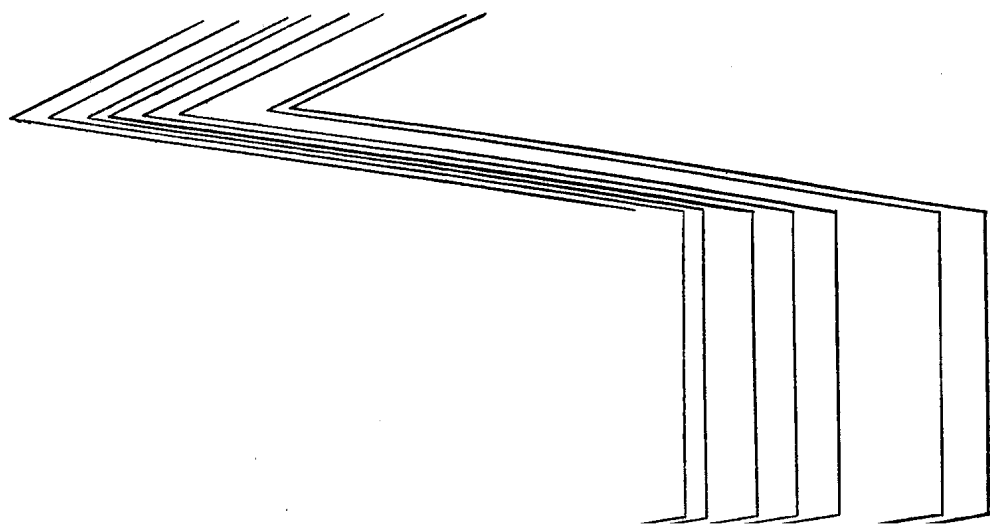
蝶々殺人事件 74

獄門島 170

かいやぐら物語 289

解説 荒正人 296

横溝正史



本陣殺人事件

1 三本指の男

この稿を起すにあたって、私は一度あの恐ろしい事件のあった家を見ておきたいと思ったので、早春のある午後、散歩かたがたステッキ片手に、ぶらりと家を出かけていった。

私が岡山県のこの農村へ疎開して来たのは、去年の五月のことだが、それ以来、村のいろんな人たちから、きつと一度は、聴かされるのが、一柳家のこの妖琴殺人事件である。

いったい人は私が探偵小説家であることを知ると、きつと自分の見聞した殺人事件などを話してくれる。この村の人たちも御多分に洩れずそれだったが、その人たちの誰でも、きつと一度は持ち出すのが、この話であった。それほどこの事件は、土地の人々にとって印象的だったと見えるのだが、それでいてその人たちの多

くは、まだこの事件のほんとうの恐ろしさは知っていないのである。

いったい人が語ってくれるそういう話に、語り手が感じている程も面白い事件はほとんどないといってよかつた。ましてや、それが小説の材料になるといふような事は、少くとも私には今まで一度もなかったことだが、しかしこの事件はちがっているのである。私は、はじめてこの話の片鱗をきいたときから、非常な興味を覚えたのだが、やがて、この事件にもっとも精通しているF君から、事の真相を聞くに及んで、なんともいえぬ大きな昂奮にとらえられたものである。それはふつうの殺傷事件とはまるで違っており、そこには犯人の綿密な計画があり、しかもなんとこれは、「密室の殺人」に相当するものであつた。

およそ探偵小説家を以て自負するほどの誰でも、きつと一度は取組んでみたくなるのが、この「密室の殺人」事件である。犯人の入るところも、出るところもない筈の部屋の中で行われた殺人事件、それをうまく解決することは、作者にとって何んという素晴らしい魅力だろう。だからたいていの探偵小説家がきつと一度はこれを取り扱っているし、畏友井上英三君の説によると、ディクソン・カアの如きはその全作品が「密室の殺人」の変型であるという事だ。私も探偵小説家冥利に、いつか一度はこのトリックと真向から取組んでみたいと思つていたので、なんと今や勞せずして、それを自分

のものにする幸運に恵まれたのだ。してみれば私は、あの恐ろしい方法で二人の男女を斬り刻んだ兇悪無慚な犯人に対して、絶大な感謝を捧げなければならぬのかも知れない。

私はこの事件の真相をはじめ聞いていたとき、すぐに今まで読んだ小説の中に、これと似た事件はないかと記憶の底を探ってみた。私は先ずルウの「黄色の部屋」を思い浮かべた。それからブルランの「虎の牙」や、ヴンダインの、「カナリヤ殺人事件」と「ケンネル殺人事件」や、ディクソン・カアの「ブレイグ・コートの殺人」や、さてはまた密室の殺人の一種の変型であると思われるスカアレットの「エンジェル家の殺人」まで思い浮かべた。しかしそれらの小説のどれともこれは違つていた。ただ、犯人がそれらの小説を読んでいた、そこに含まれたトリックをいったんバラバラに解きほぐし、その中から自分に必要な要素だけを拾ひ集めて、そこに新しい一つのトリックを築き上げたのではあるまいか。——と、そう思われる節がないでもなかつたが……

似ているといへば「黄色の部屋」が一番この事件と似ているかも知れない。但しそれも事件の真相ではなく、現場の雰囲気である。この事件のあつた部屋は、黄色いかへ紙の代りに、柱も天井も長押も雨戸も、全部紅殻で塗られていたという。もつともこの地方では紅殻塗りの家は珍しくなく、げんに私が疎開して来ている家などもそれである。但し私の家はずいぶん古いの

で、紅いというより黒光りに光っているが、この事件のあった部屋は、当時塗りかえられたばかりだということから、さぞや鮮やかな紅色を呈していた事だろう。しかも畳や襖も真新しく、金屏風を引き廻してあったというから、そこに男女二人が血みどろになってたおれていた光景は、さぞ強烈な印象だったろう。

だが、この事件にはもう一つ私を昂奮させる異常な要素があるのだ。それは事件に終始絡んで来る一面の琴である。変事が起るたびに人々が聴いたという、あの荒々しい琴の音！ いまに浪漫癖の抜け切れぬ私にとって、それは何んという大きな魅力だったろう。密室の殺人、紅殻色の部屋、そして琴の音、——いささか葉が利きすぎるほどのこの事件を、私が書きとめておかないとしたら、それこそ作家冥利につきるというものではないか。

さて、話が少し先走ったが、私の家からこの事件のあった一柳家の邸までは、ざつと十五分くらいの距離である。そこは岡——村字山ノ谷というだけあって、三方を山にかこまれた小部落で、ひくい山のうねりがヒトデの足のように平地に向って突き出している。その足の尖端に一柳家の広い邸宅があった。

この突き出した山の西側には小川が流れており、一方東側には山越しに久——村へ通ずる細い道が走っているのだが、この小川と道は平地へ出てから間もなく合している。一柳家はこの小川と道とで区画された、不規則な三角形をし

た二千坪ほどの土地を占有しているのである。つまり一柳家は北は突出した山の端に接し、西は小川に区画られ、東は山越しに久——村へ通ずる道にむかっているのだ。門は云う迄もなく東の道に面していた。

私は先ずその正門のまえを歩いてみる。道から少し上ったところに、乳のついた黒い大きな門があり、門の左右には立派なへいが、二町にわたって続いている。門から中を覗いてみると、外塀の中にもう一つの内塀があるらしいのが、いかさま大商家らしく思われたが、内塀からは見えなかった。

そこで私は歩を転じて屋敷の西側へ廻ってみた。小川に沿うて北へ進むと、一柳家の塀の切れるところにこわれた水車があり、水車の北側に土橋がかかっている。私はこの土橋を渡って、屋敷の北側を区画しているがけのうえの、ふかい竹藪の中へもぐりこんだ。このがけの端に立って南を見ると、邸内の様子がほぼ完全に俯瞰することが出来るのである。

先ず私が最初に眼を向けたのは、すぐ足下にある離家の屋根だが、この屋根の下こそ、あの恐ろしい事件のあったところなのである。人の話によると、これは一柳家の先代が隠居所に建てたもので、中は八畳と六畳きりの極くせまいものであるという。しかしさすがに隠居所だけあって、建物は小さいが、庭は凝っていて、南から西へかけて、少しくど過ぎると思われるくらい庭木や石が配置してある。

この離家の事はいずれ後に詳しく述べるが、さていまそこを越えて遠くむこうを見ると、そこには一柳家の大きな平家建ての母屋が東向きに立っており、更にその向うには分家の住居や、土蔵や納屋が不規則にならんでいた。この母屋と離家とは建仁寺垣で隔てられ、その間をつなぐのは小さい枝折戸だけだった。いまはこの垣も枝折戸も、見るかげもなくこわれているが、事件当時はまだ新しくしつかりしていて、それが悲鳴をきいて母屋から駆け着ける人々を、いっとき食いとめたのである。

これであらかた一柳家の様子は見終ったわけなので、それから間もなく私は竹藪から這い出すと、今度は村端れにある岡——村の役場のまえまで行ってみた。この役場は村の南端れにあって家ならばそこでポツンと切れて、そこから南は向うの川——村まで一面の田圃つづきであった。そして、その田圃の中を一直線に二間道路が走っているのだが、その道路を四十分ほど歩けば汽車の停車場まで行く事が出来る。だから汽車でやって来た人がこの村へ入るには、どうしてもこの道をやって来て、役場の前を通らなければならないのである。

さて、役場の真向いには、土間の広い、表に粗末な飾窓のついた家があるが、この家ももと、馬方などが立ち寄って一杯やる一膳飯屋になっていた。そしてこの家こそ、一柳家の殺人事件に重大關係を持つ、あの不思議な三本指の男が、最初に足をとめたところなのである。

それは昭和十二年十一月二十三日の夕刻、即ち事件の起つた日の前々日のことだった。

この飯屋のお主婦さんが表の牀几に腰をおろして、馴染みの馬方や、役場の吏員と冗話をしている、そこへいま云つた二間道路を、川——村の方からとほとほとやって来た一人の男があつた。その男は飯屋の前まで来るとふと立ち止って、

「ちょっとおたずね致しますが、一柳さんのお屋敷へ行くにはどういったらいいのでしょうか」

冗話をしていたお主婦さんと役場の吏員や馬方は、それを聞くといっせいに相手の服装を見、それから顔を見合せた。その男の見すばらしい風態と、あの大きな一柳家との取合せが、いかにも不調和に思われたからである。その男はくちやくちやくに崩れたお笠帽をまぶかにかぶり、大きなマスクをかけていた。帽子の下から蓬髪がもじゃもじゃはみ出し、アゴから頬へかけて、無精髯のびているのが、何んとなく胡散臭い感じであった。外套は着ずに、上衣の襟を乗そうにかき合せているが、その上衣もズボンも垢とほこりにまみれ、肘や膝のあたりは、摺りきれて光っていた。靴も両方とも大きく口を開き、ほこりにまみれて真っ白になっている。全体の様子がいかにもつかれていっているように見えるのだった。年は三十前後だろう。

「一柳さん？ 一柳さんならこの向うだが、君、一柳さんに何か用事があるのかい？」

役場の吏員にジロジロ見られて、その男はまぶしそうに瞬きしながら、マスクの奥でもぐもぐ何か云つたが、それはよく聴きとれなかった。ところがちょうどその時、今男が歩いて来た道を、一台の人力車がやって来たのだが、それを見ると、

「ああ、ちょっとお前さん、お前さんの尋ねる一柳の旦那が向うからいらっしやつたよ」

と、飯屋のお主婦さんが注意した。

俥に乗つてやって来たのは、四十恰好の、色の浅黒い、きびしい顔つきをした人だった。黒い洋服を着て、真っ直ぐに姿勢を正し、その眼は、きつと前方を見据えたきり、決してわきを振り向かなかつた。そぎ落したような頬の線と、隆い鼻が、いかにも近づき難いような印象をひとにあたえる。

これが一柳家の当主賢蔵だった。俥はそういう一柳家の主人を乗せたまま、一同のまえを通りすぎると、すぐ向うの曲り角へ消えていった。「お主婦さん、一柳の旦那がお嬢さんを貰うというのはほんとかい」

俥が見えなくなると馬方がそういつた。

「ほんとうとも、明後日が婚礼だつてさ」

「へえ？ それはまた恐ろしく急な話だな」

「それがね、愚図愚図してるとまたどこから故障が出るか分からないでね。何んでもかんでも無理矢理に押切つてしまおうというはららしい。思いこむと、あの人は強いからね」

「そりゃまあ、それだからああいうえらい学者

になれたのさ。しかし御隠居さんがよく承知なすつたね」

そういつたのは役場の吏員だった。

「むろん不服さ。しかしもう諦めていらっしやるつて話だよ。反対すればするほど旦那の方が意こ地におんななざるんだから」

「一柳の旦那は幾つだろう。四十……？」

「ちょうどだつてさ。それで初縁なんだから」

「中年の恋という奴で、こいつは若いもんより激しいそうだ」

「それでお嬢さんが二十五か六だつてね。林さんの娘だつていうじゃないか、えらいものをつかまえたね、また……玉の輿か、そんなにいきりょうかい、お主婦さん」

「それほどもないつて話だよ。だけど女学校の先生をしていただけあつて、テキパキと才弾けていて、まあ、そんなところが旦那のおめがねにかなつたわけでしょうよ。やっぱりこれらの娘は教育がななくちゃ駄目だつてさ」

「お主婦さんも女学校へでもいって、ひとつくらい旦那をつかまえるか」

「ちがいない」

三人がぐすぐつたそうに笑つた時である。さつきの男がおずおずと横から口を出した。

「お主婦さん、すみませんが水を一杯飲ませて下さいませんか。咽喉が乾いて……」

三人はびっくりしたようにその男を振り返つた。かれらはすっかりこの男の存在を忘れていたのである。お主婦さんはジロリと相手の顔を

見たが、それでもすぐコップに水を汲んで来てやった。男は礼をいってコップを受取ると、マスクを少し外したが、そのとたん、三人は思わず顔を見合せたのである。

その男の右の頬には大きな引釣れがあった。怪我のあとを縫ったのか、唇の右端から頬へかけて、深い傷が走っていて、まるで口が裂けているように見えるのだった。この男がマスクをかけているのは、感冒除けでもほり除けでもなく、その傷をかくすためだったらしい。更にもう一つ三人が無気味に思ったのは、コップを持った、その男の右手である。そこには指が三本しかなかった。小指と薬指は半分ちぎれて、満足なのは拇指と人指指と中指だけ。

三本指の男は水を飲むと、丁寧に礼をいって、一柳の主人が行ったほうへ、とほとほと歩いていったが、その後で三人はほうと顔を見合せた。

「なんだい、あれは……」

「一柳さんに何んの用事があるんだろう」

「気味の悪い奴！ あの口ったら！ わたし二度とこのコップを使う気はしないわ」

実際、お主婦はそのコップを、二度と使わぬように棚の隅へ押込んでおいたが、後日この事が非常に役に立ったのである。

ところで、眼光紙背に徹する詮索好きな読者諸賢は、この物語をここまで読むと、私がこれから云おうとする事に早くも気がつかれなければならぬ筈である。即ち、琴を弾くには指が三

本あれば足りるという事を。琴というものは拇指と人指指と中指の、三本だけで弾くものであるという事を……。

2 本陣の末裔

村の故老の話によると、一柳家は近在きつての資産家だったが、元来がこの村の者ではなかったのだ、偏狭な村人からはあまりよく云われていなかったそうである。

一柳家はもと、この向うの川——村の者であった。川——村というのは、昔の中国街道に当っていて、江戸時代にはそこに宿場があり一柳家はその宿場の本陣であったという。ところが、維新の際に主人が、この人は時代を見る明があつたと見えて、瓦解とともにいちちはやく今のところへ移つて来ると、当時のどさくさまぎれに二束三文に田地を買いこみ、たちまち大地主になりすましたのである。そういうわけだから村の人たちは一柳家のことを陰では河童の成上りと悪口をいっていた。川——村から山ノ谷へ上つて来たという意味だろう。

さて、あの恐ろしい事件があつた当時、一柳家の邸内に住んでいたのは、つぎの人々である。

先ず第一が先代の未亡人であるところの糸子刀自だが、この人は当時五十七歳で、いつも年齢のわりには大きな鬚をきちんとゆって、どんな場合でも本陣の末裔であるところの威厳と誇

りを崩さないような老婦人だった。村の人々が御隠居様というのはこの人を指す。

この糸子刀自には子供が五人いたが、当時そのうちの三人だけがここに住んでいた。その筆頭が長男の賢蔵だが、この人は京都のある私立大学の哲学科を出ていて、若い頃二三年母校の講師をつとめた事もあるが、一時呼吸器を害した事があって、郷里の家に引籠った。しかし大変な勉強家で、郷里へ引籠つてからも研究の方は怠らず、著書もあり、雑誌へもおりおり寄稿しており、この道では相当知られた学者であつたという。この人が四十まで娶らなかつたのは、健康を考慮したためというより、勉強に急がしくてこの方に頭を向けるひまがなかつたためであつたと思われる。

この賢蔵の下に妙子という妹と、隆二という弟があつたが、妙子はさる会社員に嫁ぎ、当時上海にいたから、この事件には全然関係がない。その次ぎの隆二はお医者さんで、当時大阪の大きな病院に勤務していたが、この人も事件の当夜は家にいなかった。しかしこの人は妻のあつた直後にかえつて来ているから、全然無関係というわけにはいまい。当時この人は三十五歳だった。

糸子刀自はこの隆二を産んでから長い間子供がなかつたので、もうこれでおしまいかと思つていると、十年目に男の子が生まれ、それからまた八年も経つて女の子がうまれた。それが三男の三郎と次女の鈴子である。当時三郎は二十

五、鈴子は十七だった。

この三郎というのは兄弟中での不作で、中学校を途中で放校され、神戸の私立専門学校を、これまた途中で退校させられた。そして当時は何をしてもなく、家でごろごろしていた。頭はそう悪い方ではなかったが、物事に根気がなく、その性質にはどこか狡猾などこころがあった。村でもこの青年は軽蔑されている。

ところで末子の鈴子だが、この娘はたいへん気の毒な娘さんで、両親の老境に入ってから産まれたせいも、日蔭に咲いた華のように、虚弱で腺病質だった。智能もだいぶ遅れていたが、但し、決して低能者ではなく、ある方面では、たとえば琴を弾くことなどにかけては、天才的ともいうべきところがあり、またおりおり非常に鋭いひらめきを見せる事もあるが、概してする事なす事が、七つ八つの子供よりまだ幼いところがあった。

さて、本家は以上でおしまいが、一柳家の邸内には当時もう一族分家の一族が住んでいた。分家の主人は良介りやうけいといって賢蔵けんざうたちの従兄弟で、当時この人は三十八、秋子あきこという細君との間には子供が三人あったが、子供たちはむろんこの恐ろしい物語には関係ないから、はじめから勘定に入れないことにしよう。

この良介という人は賢蔵たちとすっかりタイプが違っていて、学校は小学校を出たきりだが、算数の道に明るく、世故に長けているので、一柳家の管理人としてはもって来いの人物だっ

た。だから糸子刀自なども偏富な長男や、家にいない次男や、頼りない三男よりこの人が一番気がおけなくて、よい相談相手になるらしかった。さて、良介の妻の秋子だが、これは毒にも薬にもならない、良人のいうなりになるような平凡な女である。

本家分家を合せて以上の六人、即ち糸子刀自、賢蔵、三郎、鈴子、良介、秋子と、これだけが、封建的な空気の中に、ともかくも平穩無事の生活をつづけていたのだが、そこへ突如大きな波紋を投げかけたのが、長男賢蔵の結婚問題だった。賢蔵が結婚しようという相手は、当時岡山市の女学校の先生をしていた久保克子くぼきこという婦人だが、この結婚に一族こぞって反対したのは、克子自身に申分があったわけではなく、克子の家柄に難点があったのである。

農村へ入って見給え、都会ではほとんど死滅語となつていゝ「家柄」という言葉が、いかにいまなお活々と生きているか、そしてそれがいかに万事を支配しているかを諸君は知られるだろう。今度の敗戦以来の社会の混乱より、さすがに農民諸君も地位や身分や財産などには、以前ほど叩頭しなくなった。それらは今、大きな音を立てて崩壊しつつあるからである。しかし家柄は崩壊しない。よい家柄に対する憧憬、敬慕、自負はいまもなお農民を支配している。しかも彼らのいうよい家柄とは、必ずしも優生学や遺伝学的見地から見た、よい血統を意味するのではないらしい。旧幕時代、代々名主を勤

めたとか、庄屋であったとかいえば、たといその家から、癩疾者や癲癩病者や狂人が続出していても、よい家柄で通るのである。現在の革新時代においてすらそれだから、昭和十二年頃の、しかも本陣の家筋であることを、何よりの誇りとしている一柳家の一族が、いかに家柄の尊厳を重視したか、多くいうを要すまい。

久保克子の父はかつてこの村の小作人であった。しかしこの小作人にはいささか骨があったと見えて、村の生活に見限りをつけると、弟と二人でアメリカへ渡った。そして向うの果樹園で働きながら、何万円か溜めると、故国へ帰って来て、この村から十里ほど離れたところで、兄弟してアメリカで習得して来たところの果樹園をはじめた。兄弟はそこで晩い結婚をする。兄の方は克子を産み、そして死んだ。克子の母は良人が死ぬと実家へかえったので、だから克子は叔父の手で育てられたのである。彼女はたいへん勉強好きの娘であった。叔父も彼女の学費に金を吝しまなかった。克子は東京の女高師を出た後、郷里に近い岡山市の女学校に奉職したのである。

彼女の父と叔父が共同ではじめた果樹園はたいへん成功していたし、叔父は嚴重に、彼女の分となるべき金を取りのけていたから、克子が女学校の先生をしていたのは、生活のためではなく、彼女の自覚によるものだった。彼女は自分の財産を持っていた。しかし、一柳家の一族から見れば、彼女がいかに教育があり、聡明で

あり、財産を持っていたとしても、小作人の子
は小作人の子であった。彼女は氏も素性もない
昔の水吞百姓、久保林吉の娘なのである。

賢蔵が彼女を識ったのは、克子が肝煎りして
いた倉敷の若い知識人の集會に、講演を頼まれ
た時かららしい。その後、克子は外国語の本な
どで分らないところがあると、よく賢蔵のこ
ろへ訊きに來た。そういう交渉が一年ほどつづ
いた後、突然、賢蔵が彼女との結婚の意志を發
表したのである。

一族こぞってそれに反対した事は前にも云つ
たが、その急先鋒が糸子刀自と良介であったこ
とも首肯出来るところである。兄弟の中では妹
の妙子が、猛烈な反対の手紙を兄にあてて寄越
した。それに反して弟の隆二は母にあてて、兄
さんの好きなようにさせてあげなさい、一旦云
い出したら後へひかない人だから、と云う意味
の手紙を寄越したきりで、直接賢蔵にあてては
何も云って来なかつた。

こういう周囲の反対に対して、では、賢蔵は
どういう態度で応酬したかという、終始沈黙
の一手だった。反対に対して反駁するような事
は絶対にやらなかつた。しかし結局水は火に勝
つ。反対者はしだいに呼吸が切れ、声がかす
れ、足並みが乱れ、最後には苦笑いをして肩を
すくめながら、完全に自分たちの敗北した事を
認めなければならなかつた。

こうしてその年の十一月二十五日に華燭の典
が挙げられる事になったのだが、その晩に、あ

の恐ろしい事件が起つたのである。

だが、私はそこへ話を進める前に、後から思
えば、あれこそ事件の前奏曲であつたと思われ
るような、些細な出来事の二三を、ここにお話
しておこうと思うのである。

それは事件の前日、即ち、十一月二十四日の
午後の事である。一柳家の茶の間で、糸子刀自
と賢蔵が、いくらか気まずそうな顔をして茶を
飲んでゐた。そばには妹の鈴子がよねもなくお
人形に着物を着せていた。この少女はどこへお
いても、ひっそりと一人で遊んでいるので、決
して邪魔にされるような事はなかつた。

「だつてねえ、それが代々この家のしきたりな
んだから……」

糸子刀自はもう完全にこの息子に負けている
ので、この時も氣を兼ねるような風情だった。

「しかし、お母さん、隆二の嫁取りの時にはそ
んな事はやらなかつたじゃありませんか」

賢蔵は母のすすめる蕎麦饅頭には眼もくれ
ず、苦い顔をして煙草を喫っていた。

「それはあの子は次男だもの。あの子とあなた
とは一緒になりませんよ。あなたはこの家を継
いでいく人だし、克子さんはその嫁だから……」

「しかし克子は琴なんか弾けませんよ、きつ
と。ピアノなら弾くかも知れませんがね」

いま二人の間で問題になつてゐるのはこうで
ある。一柳家では何代か前から、跡取息子の嫁

たるべき人は、祝言の席で琴を弾かねばならぬ
という家憲があるのである。弹奏すべき琴は一

柳家の先祖から伝えられたもので、その曲目や、
またそういう家憲の起つたいわれには、難かし
い故事來歴があるのだが、それはいずれ折を見
て話すとして、いま問題となつてゐるのは、即
ち花嫁となるべき克子に、琴が弾けるかどうか
という事である。

「お母さん、今になつて、そんなことをおつ
しゃつても無理ですよ。それならそのように前
もつて云つて下されば、克子にも用意があつた
でしょうが……」

「わたしこんな事をいつてこの婚礼に水をさそ
うというのではありませんよ。また、克子さん
に恥をかかせるなんてそんな風に思つて貰つ
ちや困りますよ。しかし、家風は家風だから……」

二人の仲がいくらか険悪になりかけた時であ
る。余念なく人形と遊んでいた鈴子が、突然、
横から可愛い助け舟を出した。

「お母さま、お琴、わたしじゃいけなかつて？」

糸子刀自は眼をみはつて鈴子を見たが、賢蔵
はそれをきくと渋い笑いをうかべた。

「そりゃいい、これはひとつ鈴子に頼もう。お
母さん、鈴子なら誰にも当りさわりがなくてい
いじゃありませんか」

糸子刀自もいくらか心が動きかけたが、そこ
へひょっこり顔を出したのが甥の良介だった。

「鈴うちゃん、ここにいたのかい。ほら、御注
文の箱が出来たよ」

それは蜜柑箱くらいの大きさの、きれいに

削った白木の箱だった。

「良さん、それなに？」

糸子刀自が眉をひそめると、

「なに、玉公の箱桶ですよ。蜜柑箱でよからうという鈴うちゃんお冠りですね。そんな粗末な箱じゃ玉が可あいそうだつて、お取り上げにならないので、やっと持えたんですよ」

「だつて、ほんとうに玉、可あいそうなんですもの、新家の兄さん、有難う」

玉というのは鈴子の愛猫だが、食物に当たつたらしく、二三日吐き下しをつづけた後、その日の朝とうとう死んでしまったのである。

糸子刀自は眉をひそめて、白木の箱をみていたが、ふと気をかえるように、

「良さん、あの琴ね、あれは鈴子に弾いて貰おうというのだがどうだろう」

「そりゃ、伯母さん、いいでしょう」

良介はあっさりいうと、そこにあつたそばまん頭を頬張つた。賢蔵はそっぽを向いたまま煙草を吹かして見た。

するとそこへ入つて来たのが三郎である。

「おや、鈴うちゃん、いい箱が出来たじゃないか。誰にこさえて貰つたんだい」

「三ぶちゃんの意地悪。嘘ばかり吐いてござえてくれないんですもの、新家の兄さんにこさえて頂いたわ。よくつてよ」

「おやおや、相変らず信用がないね」

「三郎さん、あなた散髪をして来たの」

糸子刀自は三郎の頭に眼をやつた。

「ええ、いま。ところがねえ、お母さん、散髪屋で妙なことを聞いて来たんですがね」

糸子刀自が無言のまま顔を見るのを、三郎はそのままして、却つて賢蔵の方へ体を乗り出すと、

「兄さん、あなた昨日の夕方、役場のまえを俥で通つたでしょう。その時あそこの飯屋のまえに、変な男が立っているのを見やしませんでしたか」

賢蔵はちよつと眉をあげて怪げんそうに三郎の顔を見たが、なんとも答えなかつた。

「変な男つて何さ、三ぶちゃん」

良介が蕎麦饅頭を頬張りながら訊ねた。

「それがねえ、気味が悪いんだ。口から頬へかけて、こう大きな傷があつてね。おまけに右手にや指が三本きやないんだつてさ。拇指と人指と中指と。……ところがそいつが飯屋のお主婦さんに家の事を聞いてたつていうんだが、お、鈴子、おまえ昨日の晩方そんな奴がうるついているの見やあしなかつたかい」

鈴子は眼をあげて黙つて三郎の顔を見ていたが、やがて拇指、人指指、中指と口のうちに咳きながら一本一本指を出すと、いつか琴を弾く真似をしていた。

糸子刀自と三郎は黙つてその手つきを眺めている。良介はうつむいたまま、蕎麦饅頭の皮をむいている。賢蔵はやたらに煙草を吹かしていた。

3 琴鳴りぬ

いったい本陣というのは旧幕時代、参観交替の大名が、上り下りの道中で宿泊することになつている、いわば公認の宿舎だから、昔はなかなか格式張つていたものである。もつとも同じ本陣でも、東海道筋とちがつてこの辺では、往來の大名も数が少いから、したがつて規模においても自ら相違があつたろうが、本陣はやつぱり本陣であつた。

そういう本陣の後裔をもつて誇りとして一柳家のことだから、当主の結婚ともなれば、それは思いきつて派手なものでなければならぬ筈であつた。私にこの事件を話してくれたF君の話によつても、

「こういう事は万事都会より田舎のほうが大袈裟になります。ましてや一柳家ほどの家柄で、後嗣の婚礼という事になれば、お婿さんは麻かみしも、花嫁は白無垢の補襦というのがふつつで、客も五十や百は当然のことでした」

しかし事實はこの婚礼は極く内輪に行われたのである。お婿さんの側から出席したのは、家族以外に川——村の大叔父が唯一人で、賢蔵のすぐ下の弟の隆二さえ、大阪から帰つて来なかつた。花嫁のほうからも、叔父の久保銀造が唯一人出席しただけであつたという。

したがつて祝言の席そのものは極く淋しいものだったが、村人への振舞いは、そういうわけ

にはいかなかった。近在きつての大地主であつてみれば、出入りも多く、作男や小作人も少くない。そういう人たちは奥とは別に、徹宵飲み明かすのがこの辺の習慣だつた。

だから十一月二十五日の婚礼の当日は、手伝いの人々をも交えて、一柳家の台所は大混雑を呈していたが、すると夕方の六時半頃、つまり台所が一番繁忙を極めている最中のことである。勝手口からぬつと入つて来た男がある。

「御免下さい。旦那はいますか。旦那がいたら、これを渡して貰いたいんだが……」

かまの下のをたいていた下働きのお直婆さんが振り返つてみると、くちやくちやくに崩れたお釜帽を眉深にかぶつた男で、方々擦りきれた上衣の襟を、寒そうに掻き合せ、顔中かくれてしまふような大きなマスクをしているのが、いかにもうさん臭かつた。

「旦那に何か用かね」
「う、うん、旦那にこれを渡して貰いたいんです」

男は左手に小さく折つた紙片を持って、いたが、後になつてお直さんがこの時の様子を、警官に語つたところによると、

「それが妙なんです。指をみんな曲げてましてね、人指指と中指の節のあいだに紙片を挟んでいるんです。まるで癩病かびみたいな……ええ、右手はポケットへ入れたきりでした。私も変に思つて顔をのぞいてやろうとしたのですが、相手はぶいとそっぽを向くと、紙片を無理矢理に

私に押しつけて、そそくさと勝手口から、とびだしてしまつたんです」

その時台所にはほかに大勢いたのだが、その男が後になつて、あんなに重大な意味を持つて来ようとは、夢にも思いがけない事だから、誰も特に注意を払つて見た者はなかつたのである。

さて、お直さんが紙片を持ったままぼんやりしていると、そこへ新家の秋子が忙がしそうに奥から出て来た。

「ちよいと、どなたかうちのを知らない？」

「新家の旦那ならさつき外へ出ていったようでしたよ」

「まあ、仕様がないわね。この忙がしいのに何をまごまごしてゐるんだろう。今度見たら早く着更えをするように言つて下さいな」

その秋子呼び止めて、お直さんはいまの話をする、折畳んだ紙片を渡した。それはポケット日記を引裂いたような小さな紙片だつた。

「兄さんに？ ああ、そう……」

秋子はちよつと眉をひそめたが、別に大して気にも止めずに、帯の間にはさむと、台所を出て茶の間を覗いてみたが、そこには糸子刀自が手伝いの女と話しながら、着更えをしているところだつた。側には振袖を着た鈴子が、金蔴きんま絵の見事な琴をいじつていた。

「伯母さん、兄さんは？」

「賢蔵？ 書齋じゃないかしら。ああ、ちよつとお秋さん帯を結んで下さいな」

糸子刀自の着付けが出来上つたところへ、丹前婆の三郎がのっそりと入つて来た。

「三郎、まだそんな服装なりをして……いままでどこにいたの？」

「書齋にいたんですよ」

「また探偵小説を読んでいたのよ、きつと」

鈴子が琴の調子を合せながらいった。三郎は探偵小説の熱心な愛読者なのである。

「いいじゃないか。探偵小説を読んでたつて、それより鈴子、猫のお葬式はすんだのかい」

鈴子は黙つて琴を弾いている。

「まだなら早くしなよ。猫の死がいなんかいつまでもおいとくと、ニャーゴと化けて出るぜ」

「いいわよ。三ぶちゃんの意地悪。玉のお葬式は今朝早くすましたわよ」

「なんだねえ。縁起でもない。三郎も気をつけて物をおいさないよ」

糸子刀自は眉をひそめてたしなめるようにいった。

「三ぶちゃん。兄さんは書齋にいらして？」

「いいえ、兄さんは離家じゃないかしら」

「お秋さん、賢蔵にあつたら早く支度をするように云つて下さいよ。そろそろお嫁さんが見える時分じゃないか」

茶の間を出た秋子が離家の方へ行こうとして、庭下駄をつつかけているところへ、良人の良介がふだん着のまま、新家のほうからのそのそやって来た。

「あなた、何をしていらっしやるの。早く着更

えないと間にあわないじゃありませんか」

「馬鹿をいうな。花嫁の来るのは八時ということになってるんだ。何もあわてる事はないさ。お前こそどこへ行くんだ」

「離家へ兄さんを探しに……」

賢蔵は果して離家の縁側に立って、ぼんやり空を眺めていたが、秋子の姿を見ると、

「お秋さん、何んだかお天気が変わりそうですね。ええ、なに、これを私に……ああそう」

賢蔵は細かく折った紙片を電燈の下へ持って行って読んでいたが、

「お秋さん、これは一体誰が持って来たんです」

床の間の生花をなおしていた秋子は、その声の調子にただならぬものを感じて振り返ると、賢蔵はまるで噛みつきそうな表情をして、上から秋子の顔を見据えていた。

「さあ。……お直さんが受取ったんですけれど、なんだかルンペンみたいな男だったそうですよ。兄さん、なにか変わったことでも……」

そういう秋子の顔を賢蔵は白眼むように見ていたが、やがて気がついたように顔をそむけると、もう一度その紙片に眼を落したが、すぐズタズタに引裂いて、どこか捨てるところはないかというふうにあたりを見廻していたが、結局袂の中に突っ込んでしまった。

「あの、兄さん、伯母さんが早くお支度をなさるようになって……」

「ああ、そう、お秋さん、すまないが雨戸を締

めておいて下さい」

賢蔵はそう云い捨てて離家から出ていった。

これが七時頃のことと、さて、それから一時間ほどして花嫁が媒酌人夫婦に付添われて到着し、ここに祝言の式がはじまったのだが、それらの模様は出来るだけ簡単に述べることにしよ

う。まえに云った通り、この式に連なったのは、ごく少人数で、糸子刀自に三郎鈴子の兄妹、良介夫婦ともう一人、川——村の大叔父、伊兵衛という七十何歳かの老人、と、これだけが新郎がわからの出席者で、新婦がわからは叔父の久保銀造が唯一人。媒酌人というのはこの村の村長だったが、これはほんの形式だけの、頼まれ媒酌人に過ぎなかった。

さて盗事が目出度く終ると、その後で黒塗金蒔絵のあの見事な琴が持ち出され、鈴子がそれを弾いたのは、かねて打合せしておいたとおりである。鈴子はほかの事にかけてはすべて年齢よりはるかに遅れていながら、琴だけは天才ともいうべき技術を持っていたから、弾く人と弾かれる琴と、両々あいまってその夜の式場に錦上さらに花をそえたという。

しかし、婚礼の席上で琴を弾じるといふ事は、ほかにあまり例のない事だし、鈴子の弾いた一曲が、今まで聴いた事のない曲だったので、花嫁の克子が奇異な想いをしていると、糸子刀自がこう説明を加えた。

一柳家の何代か前の妻女に、大菱琴の上手な

人があった。ところがある時、さる大名の姫君がお輿入れのため西下なさる際、本陣に泊まられたのである。その時、琴の名手であるその妻女が、かねて自ら作詞作曲しておいた「鴛鴦歌」という一曲をお耳に入れたところが、お姫様は大菱喜ばれて、後日「おしどり」と名づくる一面の琴を送って寄越された。それ以来、一柳家では継嗣の婚礼の席で、必ず花嫁が琴を弾くべきものとされ、いま鈴子が弾いたのが即ちその鴛鴦歌で、琴は「おしどり」である。——と、そういう来歴をきいて、花嫁の克子は思わず眼を瞠まはった。

「まあ、それではいまのお琴は、わたしが弾くのが本当だったのでございますわね」

「そうですね。しかしあなたにその心得がおありかどうか分らなかつたので、無理とはいいかねて、鈴子に代って貰ったのですよ」

克子は黙ってひかえていたが、するとそれに代ってこたえたのは叔父の銀造だった。

「それならば、あらかじめ云って頂ければ、克子に弾かせるのですし」

「あら、お姉さんはお琴をお弾きになりますの」

「お嬢さん、これからはこのお姉さんが、あなたのよいお相手になりましょう。あなたのお姉さんになる人は、琴の先生も出来るのですよ」

糸子刀自と良介は顔を見合せていたが、するとその時賢蔵がぼそりと横から口を出した。

「それじゃその琴は克子が貰っておくといい」

糸子刀自がそれに対してすぐに返事をしなかつたので、一座はちょっと白けかけたが、それを救うように横合から口を出したのは、苦勞人の村長だつた。

「花嫁さんにそれほどのたしなみがあるんでしたら、お願いすればよかつたですね。どうです、御隠居さん、後で離家でもう一度、盃事があるでしょう。その席で改めて弾いて戴いたら」

「そうですね。そう願いまししょうか。いいえ『おしどり歌』のほうは鈴子に弾いて貰いましたから、今度はなんでもよいという事に致しましょう。あなたのお得意の、何か目出度い曲を一曲……祝言の夜に花嫁が琴を弾くというのが、この家の家風になつているのですから」

克子が後でもう一度、琴を弾く事になつたのは、こういういきさつがあつたからである。

さて、こうして式が無事に終つたのは九時過ぎだったが、それからいよいよ奥と台所で、さかんな酒盛りがはじまつた。

一体婚禮の夜の新郎新婦というものは、一種の試験に直面しなければならぬものだが、田舎ではとりわけそれがひどいようである。賢蔵と克子は真夜中過ぎまで、二組の酒の座に交替で侍つていなければならなかつた。

台所ではすぐ酒がまわつて、みだらな唄を唄い出すものもあつた。奥ではさすがにそれほど羽目を外す者はなかつたが、唯一人大叔父の伊兵衛が、泥酔して管をまきはじめた。

この人は賢蔵や良介の親達の叔父にあたる人だが、若い時に分家して、ふつう川——村の新宅のおじさんとよばれている。年寄の常としてふだんから口喧ましいうえに、酒癖が悪いことにかけても有名である。そこへもつて来て今度の婚禮には、終始不服をとなえて来た一人だから、酒がまわるとしだいにこじれて来て、新郎新婦に向つてさんざん嫌味を並べた揚句、危いから泊まれといふのもきかず十二時過ぎになつて帰ると云い出した。

「三郎、おまえ送つてあげるといい」

伊兵衛の毒舌をどこ吹く風と聞流していた賢蔵は、相手がいよいよ帰るときまるとさすがに夜道を心配したのか、弟にそう命じた。

「なに、遅くなつたらおまえもおじさんとこへ泊めて貰えばいいさ」

こうして伊兵衛を玄関まで送つて出て、そこではじめて一同は、外が大雪になつて、その間に気がついて驚いたのである。一体この辺では雪そのものが珍しいのに、その夜は三寸余も積もつたのだから、人々が驚いたのも無理はなかつた。そして後から思えばこの雪こそ、あの恐ろしい犯罪に、たいへん微妙な役割をつとめたのである。

それはさておき、新郎新婦が離家へ引きあげて、そこで床盃があつたのは、真夜中の一時頃のことであつた。その時の事について、良介の妻の秋子は、後にこう語つてゐる。

「あのお琴を離家へ運んだのは、私と女中の清

の二人でございました。そこでお床盃がありましたが、その席につらなつたのは伯母さんと私たち夫婦きりでした。三ぶちゃんも新宅のおじさんを送つていきましたし、鈴うちちゃんももう寝ていました。はい、そのお盃の後で克子さんが千鳥をお弾きになりました。琴はその後で床の間のうえに立てかけておいたのでございませぬ。爪筈は私が床の間のすみにおきました、さあ、その時床脇の連棚にあの刀がありましたかどうか、しかと憶えてはおられません」

この盃が終つたのはかれこれも二時頃のこととて、一同はそこに新郎新婦の二人を残して、母家の方へひきあげたが、その時はまださかんに雪が降つていた。

そして、それから二時間の後に、人々はその恐ろしい悲鳴と、何んともいえぬほど奇妙な、あらあらしい琴の音を聴いたのである。

4 大 惨 劇

久保銀造は自分の寢室としてあてがわれた、一柳家の奥座敷で、ひとり寢床へ入ると、急に疲れが出たような氣持ちだつた。

それも無理ではない。今度の結婚についての彼の氣遣いには、なみなみならぬものがあつたのである。

農村の封建的な感情や習慣を、知り過ぎるほど知つてゐる銀造は、どちらかといへばこの結婚には氣がすすまなかつた。かつては自分たち